

ゲルマン祖語の 具体的指定方法について

——継起的跡づけへの試み——

櫛 原 孝

序 COD (第6版, 1976) の中にみえる単語の語源の説明事項に利用されたといわれる The Oxford Dictionary of English Etymology (1966¹) (以下, ODEE と略す) と OED とを比較すると, 資料的価値はさておいて, ODEE は OED よりも新しい研究方法とその成果を取り入れた最新の権威あり且つ信憑できる語源辞典であるといわれる。ともかく, ODEE は, できる限り多くのゲルマン系の単語の語源の説明に於て, 原印欧語 (以下, IE. と略す) 及び共通ゲルマン祖語 (以下, Gmc. と略す) の指定形 (しかし, その指定方法や個々具体的な指定形には問題があると考えるが) を掲げようと努めたように思われる。こういうやり方は, 語の歴史的語源研究の一般的方法論として正鵠を得ていることは当然のことながら, 辞典における単語の語源の歴史的説明方法のあり方としては, 最早時代の趨勢であるように感じとれる。例えば, 昨年 (1980) 出た研究社, 新英和大辞典 (第5版) の場合がそうであると思われる。旧版と比較すると, 新版は, 単語の語源の説明の欄で, できる限り多くのゲルマン系の単語の IE. 及び Gmc. の指定形を掲げるように努めている。しかし, そこにみる祖語の指定方法や個々具体的な指定形には少し問題があるように思われる。その方法は折衷的で首尾一貫性が欠けるようだ。尚, 祖語形の表記法にも問題がありそうだ。新版で両祖語形の記載量をできる限り多くするために費やされたその努力は大いに評価すべきだが, そこにみる個々具体的な祖語形は少なからず批判的に用いるべきではないかと思う。ところで, 今述べた本場の権威あり且つ信憑できる OED や ODEE の辞典でさえも, ゲルマン系のすべての単語についてその起源や継起的変化のプロセスが完全に解明されたわけでもなく, また祖語の指定作

業が完成したわけでもない。否、それどころか、語源未詳の単語、祖語の指定が不可能な単語、祖語の指定を保留されている単語、また更に祖語の指定形が不完全である（即ち、語根のみが記載される）ような単語の数は余りにも多過ぎるといわなければならないのが実状だ。この意味に於て、筆者は本稿で、OED のみならず COD や ODEE にも未だ IE. 及び Gmc. の指定形が記載されていない単語、あるいはまた祖語形（特に語根）は一応記載されていてもそれが不完全であると思われるような単語を少しばかり取り上げて、筆者自ら新たに指定を試みた次第である。さて、本論に入る前に、まず筆者の指定方法の概要を簡単に説明しておこう。

(1) まず第一に重要なことは、Gmc. の指定問題は IE. のそれと密接不離の深い関係をもっているので、IE. を捨象しては Gmc. を指定することはできないということだ。この意味に於て、筆者は、まず最初に IE. の指定問題からスタートする。

(2) 真の学問的意味で、印欧諸語全体をまず最初に組織的に研究したゲルマニストというよりはむしろインドゲルマニストであった K. Brugmann (1849-1919) を筆頭者として、その後 A. Meillet (1866-1936), H. Hirt, A. Walde, J. Pokorny 等を経て H. Krahe (1898-1965) に至るに及んで、IE. 対 Gmc. の一般的且つ精密な音韻対応関係の研究は方法論的に殆ど完成・確立されたと言ってよい。こうして確立された音韻対応関係(表)をもとにして、ゲルマン諸語の極めて多数の単語の IE. 及び Gmc. の語根 (root, Wurzel, racine. 語幹 stem, Stamm, radical とは異なる) は指定することが可能になった。本稿では今述べた Krahe による Idg.—Germ. 音韻対応表（掲載は省略）を用いることにする。

(3) しかし、いかに精密な IE. 対 Gmc. の音韻対応表が出来てもこれと大雑把な語根を用いただけでは、ゲルマン諸語の各語形の複雑な現実態を十分解明することはできない。因に、各語は必ずしも語根のみから成立しないからだ。表②にみるように、これまでの各種の辞典に於ける語源の説明は、誇張した表現をすれば、しばしば大雑把に語根のみを掲げるのみで終わっていたと言えるかもしれない。従って、各語形の現実態を十分解明するためには、精密な音韻対応関係(表)をもとにして、各語の IE. における基本形（又は基語とも）(basic form or base-word, Grundform, Basisf. od. Grundwort, forme de base ou mot de base) をまず最初に指定する必要があると筆者は考える。

これは大変な作業だ。尚、この IE. 基本形は、各語形の現実態を十分把握しながらこれを十分反映させるように配慮して措定しなければならない。また、これによって、IE. 基本形は各語形の複雑な現実態の歴史的な継起的变化を十分合理的に説明できるものでなければならない。

(4) 次に、このようにして措定された IE. 基本形をもとにして、精密な音韻対応関係(表)、いわゆる Grimm (1785-1863) の法則 (Grimm's Law or Consonant-shift, Lautverschiebung, nämlich die erste L. u. die zweite L., *Loi de Grimm ou mutation consonantique*, 1822) 及び Verner (1846-1896) の法則 (Verner's Law, Verner'sches Gesetz, *Loi de Verner*, 1875), 更に類推 (analogy, Analogie, analogie) の各種の分析方法を総合的に用いることにより、Gmc. 基本形を措定する。尚、注意すべきことは、ただ単に Gmc. の基本形を措定することだけで終らずに、これにより、ゲルマン諸語の各語形の複雑な現実態の歴史的な継起的变化を十分合理的に説明しなければならないことである。

(5) 次に、Gmc. を大雑把に 2 区分することについて簡単に述べる。Gmc. の特徴は、次の 4 つの言語変化であるとされる (E. Wessén, *Die nordischen Sprachen*, 1969. Stockholm)。即ち、(1) (ゲルマン語の) 音韻推移、(2) アクセント (accent, Akzent od. Betonung, accent) の語頭音節への移動、(3) 形容詞弱変化の形成、(4) 動詞弱変化の形成である。この 4 つの特徴のうち、(1) と (2) の 2 つの特徴が、今この場合に関係する。(1) は Gmc. 全体に関係し、いわゆる Grimm 及び Verner の法則が適用されることを意味する。また (2) は、Gmc. の時代が、アクセントが語頭音節へ移動する前の段階の時期とそれが移動した後の段階の時期の 2 つに区分できることを意味すると考える。そこで筆者は、前者を前期 Gmc. (early Gmc.), 後者を後期 Gmc. (late Gmc.) とそれぞれ呼称することにする。そして、この 2 期にそれぞれ別個の Gmc. を継起的に措定することにする。特に、後期 Gmc. では、今述べたアクセントの移動と固定化 (Festakzentuierung) の結果、Gmc. 措定形の語中及び語末の発音に部分的変化を生じ、そのために Gmc. 措定形が部分的に変化するので、これを継起的に説明する必要がある。尚、今述べたように、Gmc. を大雑把に 2 区分できるとしても、これに関する実際の歴史的年代決定の問題は議論の余地があるが、本稿では取扱わない。

(6) 最後に、筆者が使用した主要な資料は Kluge 及び Pokorný の語源辞典と ODEE である。(後述の文献参照) さて、以上略述して来たことを前提

にして, Gmc. の具体的措定を取扱う本論に入ることにする。

第1項 (Mod. E. bold) に関して: IE. におけるこの語の基本形は *bhol-tó-s (swollen) であると考ええる。これは語根 *bhel-((to swell)) に印欧語的な動詞の過去分詞を作る接尾辞 (suffix) -*tó-s (cf. Skr. tá-h: Gr.-tó-s: Lat. tu-s: Goth. -th-s: Mod. E. -(e)d の -d, etc.) が接合して出来た一種の Verbal Adjective (動詞形容詞又は形容詞的分詞) である。(表図参照) 既述した Krahe の方法とその確立された Idg.—Germ. 音韻対応表 (本稿では詳細は省略する), 更にいわゆる Grimm 及び Verner の法則により, IE. *bh=Gmc. *b, IE. *o=Gmc. *a, IE. *t'=Gmc. *ð' (*ð は *t の有声摩擦音), IE. *s=Gmc. *z の関係から, この IE. 基本形は Gmc. *balðáz となる。尚, 既述したように, いわゆる後期 Gmc. では, アクセントが語頭音節へ移動し且つ固定化するので, 前期 Gmc. *balðáz > 後期 Gmc. *bálðaz となる。その結果, やがて語末の音節に発音の変化 (-*a- は発音されなくなる) を生じて Gmc. *bálðz > Goth. *balths になったと推定される。因に, 古い北ゲルマン語 ON. ballr は, ON. bal-l-r < late Gmc. *bál-ð-z であったと考えられる。即ち (1) Gmc. —*z は ON. —r (尚, ルーン rune or runic では —R) として反映されている。(2) Gmc. —*ð- は, この場合, ON. bal- の -l- に同化され, (-d- とならずに) -l- になったと考えられる一方, 比較的新しく分派したと考えられるいわゆる西ゲルマン諸語 (OE., OS., OHG.) では, Gmc. —*z は既に発音されずに消失したと考えられる。そして後期 Gmc. *balð は OE. bald (beald) = OS., OHG. bald となった。cf. Mod. G. bald (soon). (表Ⅰ, 図参照)

第2項 (Mod. E. broad) に関して: IE. におけるこの語の基本形は *bhroi-tó-s (又は *bhrai-tó-s) 《「板のように平らに切られた」あるいは少なくとも「切られた」の意味か?》であると筆者は考える。(注) 表図にみるように, この基本形はこれまでいかなる代表的な語源辞典にも載っていない。これは語根 *bher-((to cut)) の拡張形 (Erweiterung) の一つ即ち *bhroi 又は *bhrai に接尾辞 -*tó-s が接合して出来た一種の Verbal Adjective (第1項参照) であると筆者は推定する。筆者はこれを Kluge 及び Pokorný から示唆を得て措定を試みた。Kluge は Mod. E. broad に対応する Mod. G. breit [braɪt] (OHG. では breit [breit]) が OHG. bret (Mod. G. Brett u. Bord), OE. bred (Mod. E. board) 《いずれも「板」, 「平たいもの」の意味》と語源的に関係があることを認め, OHG. breit < Gmc. *braitha- < Idg. ?, OHG. bret

<Gmc. *briðōn- <Idg. *bhr̥-tó-m <Idg. *bhr̥-, *bher- ((bohren)) と推定した。(Kluge: Etym. Wörterb. der deuts. Sprache, 1967²⁰, S. 92, 98-9.) 他方, Pokorny は OE. bred, OHG. bret の IE. 基本形を *bhredhos-(>*bhr̥dho-) ((Brett)) と推定し, これを語根 *bher-((mit einem scharfen Werkzeug schneiden)) と関係づけるために(?)その拡張形の一つとして *bheredh-((schneiden)) を推定した。(Pokorny: idg. etym. Wörterb., 1959, S. 133-5, 138, 166, 169, etc.) しかし, 今述べた Kluge 及び Pokorny による IE. 推定形 (*bher-, *bhr̥-tó-m, *bheredh-, *bhr̥ēi-, *bhr̥ī-, *bhr̥ēu-, *bhr̥ū-, etc.) では, 表Ⅲにみる古代ゲルマン諸語の各形態を十分合理的に説明することはできないと筆者は考える。ここで結論を要約して述べると, 古代ゲルマン諸語の現実態を十分考慮しながら, 且つ基数詞「1」((one)) の項で既に考察し得た結果 (『大谷大学英文学会会報』, 第7号, 1980, p. 16~27. 参照), 即ち IE. *oinos の *oi=Gmc. *ainaz の *ai-: Goth. ains の ai-: ON. einn の ei-: OE. ān の ā-: OS. ēn の ē-: OHG. ein の ei-[ei-] の対応関係から類推することにより, Goth. braiths, ON. breithr 等 (以下省略) から Gmc. 及び IE. の基本形がそれぞれ *braiðáz, *bhroi-tó-s, (又は *bhrai-tó-s とも) と推定されなければならない帰結を得たのである。繰り返して言えば, この IE. 基本形は, Krahe の方法, Grimm 及び Verner の法則により, IE. *bh=Gmc. *b, IE. *oi=Gmc. *ai, IE. *ai=Gmc. *ai, IE. *o=Gmc. *a, IE. *s=Gmc. *z, IE. *t' =Gmc. *ð' (第1項参照) の関係から, Gmc. *braiðáz となる。この Gmc. 推定形は, 後期 Gmc. では, アクセントが語頭音節に移動し且つ固定化して *bráiðaz となり, 更にその結果として, 語末の音節に発音の変化を生じて *-a- は消失して Gmc. *bráiðz となる。尚, Gmc. -*z も古語 Goth. -s, ON. -r (ルーンでは -R) として反映するが, 西ゲルマンの新しい諸言語 (OE., OS., OHG.) では, 既に発音されずに消失した。(表Ⅲ参照) OHG. breit の -t は *Gmc. *ð-の第二次的変化によるもので, Grimm の法則, 特に高地ドイツ語特有の子音推移の結果である。(Gmc. *ð->WGmc. -d*->OHG. -t-). (第1項参照)

第3項 (Mod. E. brother) に関して: IE. におけるこの語の基本形は, アクセントを考慮すると, *bhráter ((brother)) であるべきで, *bhräter とはなり得ないと考ええる。(表Ⅲ参照) 因に, 古語 Skr. では bhrátar-, 同じく古語 Gr. でも φράτηρ (イオニア方言で), φράτηρ 又は φράτωρ (いずれもアッチカ

方言で)として反映するからである。尚, IE. *bh は Skr. では bh (bの帯気音), Gr. では ph (=φ) (pの帯気音)として反映する。ところで, この IE. 基本形は, Krahe の方法及び Grimm の法則により, IE. *bh=Gmc. *b, IE. *ā=Gmc. *ō, IE. *t=Gmc. *θ (*θは*tの摩擦音)の関係から, Gmc. *brōθar と指定すべきである。(IE. *bhrāter の *-e- は Gmc. *-e- 又は *-i- として反映するので, Gmc. 指定形は当然 *brōθer か又は *brōθir となる筈である。しかし, 最古語 Goth. brōthar の -ar を考慮して Gmc. *brōθar と指定すべきである。因に, Gmc. *a は Goth. a であるからだ。) (表Ⅲ参照) ところで, Gmc. *θ は西ゲルマン諸語では *ð 又は *ǰ (今述べた*θの有声音)として反映する。例えば, OE. brōthor の -th- の発音は [-θ-] ではなくて [-ð-] である。しかし一般的に言えば OE. における th は種々の条件・事情によって [θ] か又は [ð] と発音されるので綴字 (th) だけからはその発音は決めかねる。(これについては, 第12, 14, 18項を比較参照されたい。) 他方, 今述べた西ゲルマン語の *ð 又は *ǰ は OHG. d となる。これは高地ドイツ語特有の子音推移の結果である。(Gmc.*θ>WGmc. *ð>OHG. d. 第2項の場合と比較されたい)

第4項 (Mod. E. cold) に関して: IE. におけるこの語の基本形は *gol-tó-s ((chilled, frozen)) であると考え。これは語根 *gel- ((to freeze)) の異形 (variant) *gol- に接尾辞 -*tó-s が接合して出来た一種の Verbal Adjective である。(第1, 2項参照。尚, 表Ⅰ②参照) ところで, Krahe の方法, Grimm 及び Verner の法則により, IE. *g=Gmc. *k, IE. *o=Gmc. *a, IE. *s=Gmc. *z, IE. *t'=Gmc. *ð' (第1, 2項参照) の関係から, この IE. 基本形は Gmc. *kalðáz となる。更に, 後期 Gmc. では, アクセントが語頭音節に移動・固定化し更にその結果として語末の音節の -*a- は発音されずに消失し *kálðz となる。尚, Gmc.—*z も古語 Goth.—s, ON.—r (ルーンでは—R) として反映するが, 西ゲルマンの新しい諸言語では既に発音されずに消失した。(第1, 2項参照。尚, 表Ⅲ参照) OHG. kalt の -t は, 既述した第2項の OHG. breit の -t の場合と全く同じ結果によるものである。

第5項 (Mod. E. dead) に関して: IE. におけるこの語の基本形は *dhau-tó-s ((dead)) であると考え。これは語根 *dhau- ((to cease to live)) に接尾辞 -*tó-s が接合して出来た一種の Verbal Adjective である。(第1, 2, 4項参照。尚, 表Ⅱ参照) ところで, Krahe の方法, Grimm 及び Verner の法則

により, IE. *dh=Gmc. *d, IE. *au=Gmc. *au, IE. *o=Gmc. *a, IE. *s=Gmc. *z, IE. *t'=Gmc. *ð' (第1, 2, 4項参照) の関係から, この IE. 基本形は Gmc. *dauðáz となる。更に, 後期 Gmc. では, アクセントが語頭音節に移動・固定化し, その結果として語末の音節の *-a- は発音されずに消失して *dáuðz となる。尚, Gmc. —*z も古語 Goth.—s, ON—r (ルーンでは—R) として反映するが, 西ゲルマンの諸語では既に発音されずに消失した。(第1, 2, 4項参照。尚, 表図参照) また, OHG. tōt の t- 及び -t も, 第2項の OHG. breit の -t 及び第4項の OHG. kalt の -t の場合と全く同じ結果によるものである。

第6項 (Mod. E. death) に関して: IE. におけるこの語の基本形は *dháu-tu-s ((death)) であると考ええる。これは語根 *dhau-((to cease to live)) に抽象名詞を作る接尾辞 *-tu-s < *-to-s が接合して出来た一種の名詞である。(表図参照) (cf. Lat. ex-i-tu-s) ところで, Krahe の方法及び Grimm の法則により, IE. *dh=Gmc.*d, IE. *au=Gmc. *au, IE. *u=Gmc. *u, IE. *s=Gmc. *z, IE. *t=Gmc. *θ (*θは*tの摩擦音) の関係から, この IE. 基本形は Gmc. *dáuθuz となる。Goth. dauthus < Gmc. *dáuθuz. 更に, Gmc. *dáuθuz は語末の音節に発音の変化を生じ, *-uz は発音されずに消失して *dauθ となる。(表図参照) 西ゲルマンの OE. dēath, OS. dōth, OHG. tōd の各語形はこれによって説明できる。尚, OHG. tōd の t- 及び -d は, 高地ドイツ語特有の子音推移の結果によるものである。(前項及び第3項参照)

第7項 (Mod. E. eight) に関して: IE. におけるこの語の基本形は, アクセントを考慮すると, *októ(u) ((8)) であるべきだと考える。(表図参照) 因に, 古語 Skr. では aṣṭá, 同じく古語 Gr. でも ἑκτώ として反映するからである。尚, IE. *o, *ō は Skr. では a, ā として, また Gr. では o, ō (=ω) としてそれぞれ反映する。また IE. *k は Skr. では ṣ (又は ś), Gr. では k として反映する。ところで, この IE. 基本形は, Krahe の方法及び Grimm の法則により, IE. *o=Gmc. *a, IE. *ō=Gmc. *ō, IE. *k=Gmc. *χ (*χは*kの摩擦音) の関係から, Gmc. *aχtó となる。これは, 後期 Gmc. では, アクセントが語頭音節に移動・固定化し, その結果として *áχtō になる。(表図参照)

第8項 (Mod. E. father) に関して: IE. におけるこの語の基本形は, アクセントを考慮すると, *pātér ((father)) であるべきだと考える。(表図参照) 因

に、古語 Skr. *pitár-*、同じく古語 Gr. でも *πατήρ* として反映するからである。尚、IE. *ǵ, *ē は Skr. では *i, ā* として、また Gr. では *a, ē (=η)* として、それぞれ反映する。ところで、この IE. 基本形は、Krahe の方法、Grimm 及び Verner の法則により、IE. *p=Gmc. *f, IE. *ǵ=Gmc. *a, IE. *ē=Gmc. *ē, IE. *t'=Gmc. *ð' (第1, 2, 4, 5項参照) の関係から、Gmc. *faðér となる。これは後期 Gmc. では、アクセントが語頭音節に移動・固定化し、その結果として、*fáðér となる。(表Ⅲ参照) 尚、この語中の *-ð- は、西ゲルマン諸語では -d- として反映するが、特に OHG. では -t- として反映する。これは既述したように、高地ドイツ語特有の子音推移の結果によるものである。(第2, 4項参照)

第9項 (Mod. E. four) に関して：IE. におけるこの語の究極的な原形は *qwetwóres (4) であると推定できるであろう (Kluge, Pokorný, etc.)。しかしゲルマン語として反映するこの語の IE. 基本形は、Kluge 及び Krahe が述べているように、やはり *petwóres であると推定した方が正しいと筆者は考える (Kluge, op. cit., S. 821; Krahe: Germ. Sprachw., Bd. I, S. 84, Bd. II, S. 39)。(尚、表Ⅲ参照) ところで、問題の IE. 基本形はゲルマン祖語以前 (vorgermanisch) の段階、即ち印欧語の段階で行なわれていたことがらである。太古の印欧語の段階で原形から基本形への変化・発展が既に行なわれていたことを我々はここで知る。しかしその変化・発展の理由に関しては議論の余地のあるところだが、本稿では論究する余裕はない。ともかく、今述べた IE. 基本形が *petwóres でないと、表Ⅲにみる古代ゲルマン諸語の各語形を十分合理的に説明できないと筆者は考える。さて、このようにして推定された IE. 基本形は、Krahe の方法、Grimm 及び Verner の法則により、IE. *p= Gmc. *f, IE. *e=Gmc. *i, IE. *ǵ=Gmc. *ō, IE. *s=Gmc. *z, IE. *t'= Gmc. *ð' (第1, 2, 4, 5, 8項参照) の関係から、Gmc. *fiðwóriz となる。尚、これは、後期 Gmc. では、アクセントが語頭音節に移動・固定化し、その結果として、*fíðworiz となり、やがて語末の -iz は発音されずに消失して *fiðwor となる。(表Ⅲ参照) この Gmc. 推定によって、古代ゲルマン諸語の各語形は十分合理的に説明できる。(拙稿「ゲルマン祖語基数詞 (1～10) の推定方法について参照)

第10項 (Mod. E. god) に関して：IE. におけるこの語の基本形は *g'hu-tó-m 《the invoked being》であると考える。これは語根 *g'hu- 《to invoke》

に動詞の過去分詞を作る接尾辞 *-t6-* に **m* が接合して出来た一種の中性名詞である(尚, **m* は Lat. *-um*, Gr. *-ov* として反映する) と考える。(表図参照) この IE. 基本形は, Krahe の方法, Grimm 及び Verner の法則により, IE. **g'h=Gmc. *ȝ* (**ȝ* は **g* の摩擦音。尚, 第19項参照), IE. **u=Gmc. *u*, IE. **o=Gmc. *a*, IE. **t'=Gmc. *ð'* (第1, 2, 4, 5, 8, 9項参照) の関係から, Gmc. **ȝuðám* となる。尚, これは, 後期 Gmc. では, アクセントが語頭音節に移動・固定化し, その結果として **ȝúðam* となり, やがて語末の *-am* は発音されずに消失して **ȝúð* となる。(表図参照)

第11項 (Mod.E. hand) に関して: IE. におけるこの語の基本形は **kom-tú-s* (「つかむもの」又は「手」の意味か?) であると筆者は考える。(注) 筆者は既述の Kluge (op. cit. S. 287 u. S. 877) から示唆を得て, このように措定した。(表図参照) この IE. 基本形は, 語根 **kem-*, **kom-*, **kan-*, **kṃ* (いずれも *to seize, catch* の意味か?) に普通名詞を作る接尾辞 **-tú-s* が接合して出来た一種の名詞であると考ええる。この IE. 基本形は, Krahe の方法, Grimm 及び Verner の法則により, IE. **k=Gmc. *χ* (第7項参照) IE. **o=Gmc. *a*, IE. **u=Gmc. *u*, IE. **s=Gmc. *z*, IE. **t'=Gmc. *ð'* (第1, 2, 4, 5, 8, 9項参照) の関係から, Gmc. **χamðúz* となる。尚, これは, 後期 Gmc. では, アクセントが語頭音節に移動・固定化し, その結果として語中の *-m-* の発音が *-n-* に変化して **χánduz* となる。(第18項参照) Goth. *handus* < 後期 Gmc. **χánduz*. 更に, この Gmc. 措定形の語末の *-uz* はやがて発音されずに消失して **χánd* となる。(表図参照) 西ゲルマン諸語の各語形はこれによって十分説明できる。

第12項 (Mod. E. heaven) に関して: IE. におけるこの語の基本形は **k'émenos* (「cover, vault」の意味) であると考える。これも既述の Kluge (op. cit. S. 308) から示唆を得て措定した。(表図参照) この IE. 措定形は, 語根 **k'em* (「to cover」) に動詞の完了分詞を作る接尾辞 **-no-s* が接合して出来たものと考ええる。(cf. Gr. *τέκ-vo-ν < τέκτω*) この IE. 基本形は, Krahe の方法及び Grimm の法則により, IE. **k'=Gmc. *χ* (第7, 11項参照), IE. **e=Gmc. *i*, IE. **o=Gmc. *a*, IE. **s=Gmc. *z* の関係から, Gmc. **χíminaz* となる。尚, 後期 Gmc. では, この措定形の語中の *-a-* は発音されずに消失して, **χíminz* となる。Goth. *himins* < 後期 Gmc. **χíminz*. 更に, この措定形の語末の *-z* もやがて消失して **χímin* となる。(表図参照) 尚 OS. 及び

OHG. himil (Mod. G. Himmel) の -l は *n の異化によるものとする。また同様に, OS. heban の -b-, OE. heofon (e) 及び hefen の -f- (この場合は [v] と発音する。第3, 14, 18項と比較参照されたい) 及び OE. heben の -b- も *m - の異化によるものとする。

第13項 (Mod. E. loud) に関して: IE. におけるこの語の基本形は $^*k'lũ-tó-s$ (heard, famous) であるとする。これは語根 $^*k'leu-$, $^*k'lu-$ ((to hear)) に動詞の過去分詞を作る接尾辞 $^*tó-s$ (第1, 2, 4, 5項参照) が接合して出来た一種の Verbal Adjective である。(表図参照) この IE. 基本形は, Krahe の方法, Grimm 及び Verner の法則により, IE. $^*k'=Gmc. ^*\chi$ (第7, 11, 12項参照), IE. $^*o=Gmc. ^*a$, IE. $^*s=Gmc. ^*z$, IE. $^*t'=Gmc. ^*\delta'$ (第1, 2, 4, 5項参照) の関係から Gmc. $^*\chi lũ\delta'áz$ となる。これは, 後期 Gmc. ではアクセントが語頭音節に移動・固定化し, その結果として語中の -a- は発音されずに消失して, $^*\chi lũ\delta z$ となる。これから Goth. *hlúds を推定できる。更に, この措定形の語末の -z もやがて消失して $^*\chi lũ\delta$ となる。(表図参照) この措定形によって西ゲルマン諸語の各語形は十分説明できる。

第14項 (Mod. E. love) に関して: IE. におけるこの語の基本形は $^*léubh-$ (love, desire) であるとする。(表図参照) この語の語根も $^*léubh-$ ((to love, desire)) である。ところでこの IE. 基本形は, Krahe の方法及び Grimm の法則により, IE. $^*bh=Gmc. ^*\beta$ ($^*\beta$ は *b の摩擦音), IE. $^*eu=Gmc. ^*eu$ 又は *iu の関係から, Gmc. $^*léu\beta-$ 及び Gmc. $^*liu\beta-$ と措定できる。しかし, この両 Gmc. 措定形の語中の母音 $^*éu-$ 及び $^*iu-$ は最古語 Goth. -lubō (それに加えて OE. lufu, OHG. luba も) の語中の母音 -u- を説明することは出来ないとする。因に, この Goth. -u- は, 上記の Gmc. $^*eu-$ 又は $^*iu-$ = IE. $^*eu-$ に遡源すべきではなくて, Gmc. $^*u-$ = IE. $^*u-$ に遡源されなければならないからである。尚また, 最古語 Goth. ga-laubjan ((to believe)) の語中の母音 -au- も, 今述べた両 Gmc. 措定形の語中の母音 $^*éu-$ 及び $^*iu-$ によって説明することはできない。因に, この Goth. -au- は Gmc. $^*eu-$ 又は $^*iu-$ = IE. $^*eu-$ に遡源すべきではなくて, Gmc. $^*au-$ = IE. $^*au-$ (又は $^*ou-$) に遡源されなければならないからだ。以上述べた理由によって筆者は更に Gmc. $^*lu\beta-$ 及び Gmc. $^*lau\beta-$ をも追加措定したい。(表図参照) 尚, OHG. liubi については, OHG. luba > OHG. liubi > MHG. liebe > Mod(H)G. Liebe となる。(OE. lufu の語中の -f- の発音は [v]。第3, 12,

18項を比較参照されたい)

第15項 (Mod. E. mother) に関して: IE. におけるこの語の基本形はアクセントを考慮すると *mātér 《mother》とならなければならない (しかし究極的な IE. 原形が *mā であるかどうかは保留したい) と筆者は考える。(表図参照) 因に、古語 Skr. では mātár- として、同じく古語 Gr. では, μήτηρ, ドーリス方言の μάτηρ として反映する。しかし、この場合、同じ古語でも Skr. の方が (Gr. よりも) アクセントの位置を古く正しく保持していると考ええる。また、IE. 基本形が *mātér でないと、表Ⅲにみる古代ゲルマン諸語の各語形を十分合理的に説明できないと筆者は考える。さて、この IE. 基本形は、Krahe の方法、及び Verner の法則により、IE. *ā=Gmc. *ō, IE. *e=Gmc. *e 又は *i, IE. *ʷ=Gmc. *ð' (第1, 2, 4, 5, 8, 9, 11項参照) の関係から、Gmc. *mōðér 及び Gmc. *mōðír と措定できる。ところで、この両者の系統に対応する単語が Goth. にはないので、詳細は不明であるが、比較的新しく分派したと考えられる西ゲルマン語、特に OS. mōdar, OHG. muotar の両語中にみえる -ar を考慮して、筆者は、いわゆる後期 Gmc. *móðar を措定した。(表図参照) 尚、初期 Gmc. の単語のアクセントは、後期 Gmc. では、語頭音節に移動・固定化することは既述の通り。また、OHG. muotar 及び muoter の語中の -t- もいわゆる高地ドイツ語特有の子音推移の結果であることも既に述べた。(第2, 4, 10項参照)

第16項 (Mod. E. mourn) に関して: IE. におけるこの語の基本形は *mér-nō-no-m 《to be anxious about, remember sorrowfully》であると筆者は考える。筆者は、次項で述べる Pokorny から示唆を得てこの IE. 基本形を考えた。この IE. 基本形は語根 *(s)mer- 《to think, consider, remember》に *-nā-o-no-m (IE. の動詞の不定詞の語尾) が接合して出来たものであると考える。(表図参照) とところで、この IE. 基本形は、Krahe の方法により、IE. *er 又は *r=Gmc. *ur (第19項参照) の関係から、Gmc. *múrñōnam と措定したい。そして、この措定形の語末の *-am はやがて発音されなくなって消失し、*múrñōn (Gmc. 後期) になったと考える (表図参照) 尚、この Gmc. 措定形の語末の *-ōn は古代ゲルマン諸語の動詞の不定詞 (Infinitive, Infinitiv, Infinitif) の語尾の祖形である。(次項参照)

第17項 (Mod. E. run) に関して: IE. におけるこの語の基本形は *ré-nw-o-no-m 《to move about, move》であると考える。筆者は Pokorny に従ってこ

れを措定したい (Pokorny, op. cit. S. 328)。この IE. 基本形は語根 *er-, *or-, *r (《いずれも to set in motion, stir up, raise の意味》) に *-nw-o-no-m (IE. の動詞の不定詞の語尾) が接合して出来たものであると考える。(前項参照。尚、表Ⅱ参照) さて、この IE. 基本形は、Krahe の方法により、IE. *e=Gmc. *i 又は *e の関係から、Gmc. *rínwanam 又は *rénwanam と措定したい。そして、この措定形の語末の *-am はやがて発音されなくなって消失し、*rí-nw-an (又は *ré-nw-an) (後期 Gmc.) になったと考える。尚、この両 Gmc. 措定形の語末の *-an も、前述したように、古代ゲルマン諸語の動詞の不定詞語尾の祖形である。(前項参照) ところで、筆者は、古代ゲルマン諸語の各語形を考慮して、今述べた両 Gmc. 措定形のうち特に Gmc. *rí-nw-an の方を Gmc. 基本形として認めたい。(尚、*rí-nw-an > *rinnan) (表Ⅱ, 表Ⅲ参照) この Gmc. 基本形によって古代ゲルマン諸語の各語形は十分合理的に説明できる。

第18項 (Mod. E. seven) : IE. におけるこの語の基本形はアクセントを考慮すると *septm̃ (7) であると考ええる。(表Ⅱ参照) 因に、古語 Skr. では saptá として、同じく古語 Gr. では ἑπτὰ としてそれぞれ反映するからである。尚、IE. *s は Skr. s : Gr. h (=') として、IE. *e は Skr. a : Gr. e (=ε) として、また IE. *m̃ は Skr. a : Gr. a としてそれぞれ反映する。ところで、この IE. 基本形は、Krahe の方法及び Verner の法則により、IE. *s=Gmc. *s, IE. *e=Gmc. *e 又は *i, IE. *m̃=Gmc. *um, IE. *p'=Gmc. *β' (*β は *b の摩擦音) の関係から、Gmc. *seβúm 及び Gmc. *siβúm と措定できる。(表Ⅱにみる古代ゲルマン諸語の各語形を考慮するとき、今措定した IE. 基本形 *septm̃ は、実際にはこの語中の *-t- が消失しているので、*sep̃m̃ が IE. 基本形であると考えてもよい。IE. *sep̃m̃=Gmc. *seβúm=Gmc. *siβúm.) (拙稿「ゲルマン祖語基数詞 (1~10) の措定方法について」参照) ところで表Ⅱにみる古代ゲルマン諸語の各語形を考慮するとき、Gmc. *siβúm の方が妥当な措定の仕方かもしれないが、特に OE. seofon(e) [séovon(e)] の語形に注目するとき、この語中の母音 -eo-[eo] は Gmc. *seβúm の方が (Gmc. siβúm よりも) より一層妥当な措定の仕方であることを示唆しているようにみえるのである。以上述べた事情により、筆者は前述した *IE. 基本形 *septm̃ の Gmc. 基本形は *seβúm であると考ええる。尚、この Gmc. 基本形のアクセントは、後期 Gmc. では語頭音節に移動・固定化し、語末の -m

は軽く発音されるようになり、-n に変化して *séβun になると考えられる。(表③参照。尚、第11項参照) (今述べたように OE. seofon(e) の語中の -f- の発音は [v] であるが、これについては第3, 12, 14項を比較参照されたい)

第19項 (Mod. E. sorrow) に関して: IE. におけるこの語の基本形は *swérgh-o-m (worry, sickness) であると考ええる。これは語根 *swergh- (to worry, be sick) に *-o-m がついて出来たものであると考えたい。(第10項及び表②参照) ところで、この IE. 基本形は、Krahe の方法、Grimm 及び Verner の法則により、IE. *er 又は *r=Gmc. *ur (第16項参照), IE. *gh=Gmc. *g, (第10項参照), IE. *o=Gmc. *a の関係から、Gmc. *s(w)úrǵa(m) となる。Goth. saúrǵa (この語中の -aú- の発音は [o]) < Gmc. *s(w)úrǵa(m)。尚、この Gmc. の措定形の語末の -a はやがて発音されずに消失して *s(w)úrǵ となる。(表③参照)

第20項 (Mod. E. two) に関して: IE. におけるこの語の基本形は *dwō (2) であると筆者は考えたい。しかし、これに更に *-s がついて一種の異形 (allomorph) としての *dwō-s も措定できると考えられる。(表④参照) (拙稿「ゲルマン祖語基教詞 (1~10) の措定方法について」参照) そして、後者は、Krahe の方法及び Grimm の法則により、IE. *d=Gmc. *t, IE. *s=Gmc. *z, IE. *ō=Gmc. *ō の関係から、Gmc. *twōz となる。Goth. twos < Gmc. *twōz. この措定形の語末の -z はやがて発音されずに消失する。(表④参照) 尚、語頭の *t= は OHG. では z- として反映する。これは高地ドイツ語特有の子音推移の結果によるものである。

(注) 第2項及び第11項に関する単語は、いわゆるゲルマン語特有の語 (ゲルマン諸語以外にはあらわれない) であるといわれる (Kluge, ODEE, etc) が、本稿では、これを IE. にまで遡って考察することにする。

(本学専任講師 言語学)

表Ⅲ④：5つの代表的な古代ゲルマン語の若干の単語の例証

項目 番号(Mod.E.)	言語名	Goth. (IV)	ON. (XII)	OE. (VIII)	OS. (IX)	OHG. (VIII)
第1項(bold)	*þalþs		ballr ((dangerous, fatal))	b(e)ald	bald	bald
第2項(broad)	braiths		breithr	brād	brēd	breit
第3項(brother)	brōthar		bróthir	brōthor	brōthar	bruodar, bruoder
第4項(cold)	kalds		kaldr	Anglian: cald WS: céald	cald	kalt
第5項(dead)	dauths		dauthr	dēad	dōd	tōt
第6項(death)	dauthus		dauthr	dēath	dōth	tōd
第7項(eight)	ahtau.		átta	e(a)hta, ahta	ahto	ahto
第8項(father)	fadar		fathir	fader	fadar	fater
第9項(four)	fidwör, fidur-		fjórir ⑩, fjörar ⑥, fjogor ⑨	fēower, fyther-, fither-	fi(u)war, fiori, fiæther	fior, fier
第10項(god)	guth		guth, god	god	god	got

表I⑩

言語名 項目 番号 (Mod.E.)	Goth. (IV)	ON. (XII)	OE. (VIII)	OS. (IX)	OHG. (VIII)
第11項 (hand)	handus	hōnd	hand, hond	hand	hant
第12項 (heaven)	himins	himinn, hifn-	heofon (e), hefen, heben	heban, himil	himil
第13項 (loud)	?	?	hlūd	hlūd	(h)lūt
第14項 (love)	-lubō	?	lufu	?	luba, liubi
第15項 (mother)	(+シ) ?	mōthir	mōdor	mōdar	muotar, muoter
第16項 (mourn)	maurnan 《be anxious》	morna 《pine away》	murnan	mornon, mornian	mornēn 《be anxious》
第17項 (run)	rinnan	rinna	rinnan	rinnan	rinnan
第18項 (seven)	sibun	sjaу	scofon (e), scofonu	sib(h)un	sibun
第19項 (sorrow)	saúrga	sorg	sorg, sorh	sor(a)ga	s (w)or(a)ga
第20項 (two)	twai ⑩, twōs ④, twa ⑩	tveir ⑩, tvær ④, tvau ⑩	twēgen ⑩, twā ④, ⑩, tū ⑩	twēne ⑩, twā, twō ④, twē ⑩	zwēne ⑩, zwā, zwō ④, zwei ⑩

表2④：表Ⅰの諸語について推定的に再構成された原印欧語（種々の再構形を含む）

種々のIE. 措定形 項目番号(Mod.E.)	COD (第5版, 1964) による IE.	COD (第6版, 1976) による IE.	Klein (1971) による IE.	Kluge による Idg.	ODEE (1966) による IE.
第1項(bold)	?	?	*bhel- ((to swell))	*bhel->*bhol- ((geschwollen))	*bheltos((swollen)) <*bhel((to swell))+ -tos
第2項(broad)	?	?	?	?	?
第3項(brother)	?	*bhrāter	?	*bhrātor-	*bhrāter
第4項(cold)	?	?	*gel- ((to be cold, freeze))	?	*gel-, *gol-
第5項(dead)	*dau-((to cease to live))	*dhautós ((dead)) <*dhau-((to die))	*dhew-, *dheu-, *dhow-, *dhou-, ((to pine away, die))	*dhew, *dhow	*dhautós<*dhau- ((to cease to live))
第6項(death)	?	*dhau-((to die))	*dhew-, *dheu-, *dhow-, *dhou-	*dhew, *dhow	?
第7項(eight)	?	*oktō	*oktō(u) ((twice four))	*ok'tōu <*ak'-*ok'-(spitz))	*oktō
第8項(father)	?	*p'tēr	*pa ((a child's word for father))	*p'tér	*p'tér
第9項(four)	?	*quetwōr-	*qwetwōr-	*petwor<*kwetwōr-	*qwetwōr-
第10項(god)	?	*ghut-	*ghu-tó-m ((the invoked being)) <*ghu-((to invoke))	*ghu-tó-m ((das angerufene Wesen)) <*ghu-(anrufen))	*ghut- <*ghu-

表2④

項目 番号	種々のIE. 措定形	OED による Aryan	Pokorny による Idg.	Skeat による Idg.	Wahrig による Idg.	Webster による IE.
第1項 (bold)	*bodl, *boðl, *bothl		*bhel-, *bhlē- ((aufblasen, aufschwellen))	?	*bhel-, *bhol-((schwellen))	?
第2項 (broad)	?		?	?	?	?
第3項 (brother)	*bhrāter, *bhrātor, *bhrātr		*bhrāter- ((Bruder))	*bhar-(?)	*bhrator-	?
第4項 (cold)	?		*gel(ə)- ((kalt, frieren))	?	*gel- ((aufkühlen, (ge)frieren))	?
第5項 (dead)	*dhau-to-s/*dhau ((to die))		*dheu-, *dhw-ei- ((sterben))	?	?	?
第6項 (death)	*dhau ((to die))		*dheu-, *dhw-ei-	?	?	?
第7項 (eight)	?		*ok'tō(u)	?	*oktou	?
第8項 (father)	*pētēr, *pētér, *pētr-		*pēté(r)	*pa-((to protect, nourish))	?	?
第9項 (four)	*qetwer-, *qetwōr-, *qetur-		*petwores <*qetwores	*kwatwar	*quetuor	?
第10項 (god)	*ghutō-m, *ghudho-m ((what is invoked)) <*gheu ((to invoke))		*g'hu-tō-m ((angerufene Wesen)) <*g'hu-to-((angerufen, *g'hau-, *g'hawə-((rufen, anrufen))	?	*ghau-((anrufen, rufen))	?

表2④

種々のIE. 項目 番号(Mod.E.)	種々のIE. 研究社, 新英和大辞 典(第5版, 1980)に よる IE.	筆者による IE.
第1項(bold)	*bholto<*bhel- (to blow, swell)	*bhol-tó-s<(swollen) (<*bhel-(to swell))
第2項(broad)	?	*bhroi-tó-s<(切られた)<(切り開かれた)<(?) (<*bher-(to cut))の拡張形の一つ(?)
第3項(brother)	*bhräter- (brother)	*bhráter<(brother)
第4項(cold)	*gol-, *gel-	*gol-tó-s<(chilled, frozen) (<*gel-(to freeze))
第5項(dead)	*dhautós<*dheu- (to cease to live)	*dhau-tó-s<(dead) (<*dhau-(to die))
第6項(death)	*dheu-(to die)	*dháu-tu-s<(death) (<*dhau-(to die))
第7項(eight)	*oktō<(twice four)	*októ(u)<(8)
第8項(father)	*pəter<(father)	*pəter<(father)
第9項(four)	*kwetwer-(4)	*petwóres<(4) (<*qwetwóres)
第10項(god)	*ghu-to-m <*ghau-(to call out, invoke)	*g'hu-tó-m<(the invoked being) (<*g'hu-(to invoke))

表2⑦

種々の IE. 指定形 項目 番号(Mod. IE.)	COD (第5版, 1964) による IE.	COD (第6版, 1976) による IE.	Klein (1971) による IE.	Kluge による Idg.	ODEE (1966) による IE.
第11項(hand)	?	?	?	*kom-tu-s ⟨*kem, *kam, *km̥ *k'emeno ⟨Decke, Gewölbe⟩⟨*k'em-, (bedecken)⟩	?
第12項(heaven)	?	?	*k'em-, *k'am- ⟨to cover⟩	*k'lū-tō-s ⟨*k'lū-tō-s (heard)⟩	?
第13項(loud)	?	*klutos ⟨*klu-⟨to hear⟩	*k'leu-⟨to hear⟩	*k'lū-tō-s ⟨*k'leu(hören)⟩	*klütōs ⟨*kleu-, *klu- ⟨to hear⟩
第14項(love)	?	?	*leubh-⟨to love, approve, praise⟩	*leubh-	?
第15項(mother)	?	*māter-	*māter- ⟨*ma)	*māter- ⟨(*ma)	*māter-
第16項(mourn)	?	?	*s mer-⟨to care for, be anxious about, think, consider, remember⟩	?	*s mer-
第17項(run)	?	?	*er-, *or- ⟨to set in motion, stir up, raise⟩	?	?
第18項(seven)	?	*septm̥	?	*septm̥	*septm̥
第19項(sorrow)	?	?	?	*swergh- ⟨sorgen, sich um etwas kümmern⟩	?
第20項(two)	?	?	*duwō-, *duwōu-, *dwō(u)-	*d(u)wōw	*d(u)wo(u)

表20

種々のIE. 項目番号 Mod.E.)	OED による Aryan	Pokorny による Idg.	Skeat による Idg.	Wahrig による Idg.	Webster による IE.
第11項(hand)	?	?	?	?	?
第12項(heaven)	?	*k'em- ((bedecken, verhüllen))	*kam((to bend))	*kemenō<(*kem- ((bedecken, verhüllen))	?
第13項(loud)	*klūtō<((heard)) <(*kleu((to hear))	*k'leu-, *k'lewə-, <(*k'lū<((hören))	*kru((to hear))	*klu-to- <(*kleu((hören))	?
第14項(love)	*leubh-, *loubh-, *lubh-	*leubh-((gern haben, begehren))	*lubh- ((to covet, desire))	*leubh- ((gern haben))	?
第15項(mother)	*māter	*māter- (<(*mā)	?	*mater- (<(*ma)	?
第16項(mourn)	*(s)mer- ((to remember))	*(s)mer-((gedenken, sich erinnern, sorgen))	*mur-	?	?
第17項(run)	?	*re-nw-ō<(*er-, *or-, *r-((sich in Bewegung setzen, erregen))	*ar-((to rise, drive))	*er(ə)-, *re- *reu-((sich in Bewegung setzen, sich bewegen))	?
第18項(seven)	*septm	*septm	*saptan	*septm	?
第19項(sorrow)	?	*swergh-((sorgen, krank sein))	*si-(?)	*swergh-((sich um etwas kümmern)) *serg(h)-((krank sein))	?
第20項(two)	?	*dwō(u) ⑩, *duwōu ⑩, *dwai ⑩, *dwei-, *dwoi-, *dwi-	*dua, *dwa	*d(u)uou	?

表2④

種々の IE. 項目 番号(Mod.E.)	研究社, 新英和大辞 典(第5版, 1980)に よる IE.	筆者による IE.
第11項(hand)	?	*kom-tú-s(seizer)((catcher))(?) (<*&kem-, *kom-, *kan-, *kni-((to catch, seize))(?))
第12項(heaven)	*kamer- ((vault; to bend))	*k'émenos((vault))((cover)) (<*&k'em-((to cover))
第13項(loud)	*k'leu-((to hear))	*k'lū-tó-s((heard))((celebrated)) (<*&k'leu-, *k'lu-((to hear))
第14項(love)	*leubh-((to care for, desire, love))	*léubh-((to love, desire))
第15項(mother)	*māter- ((mother))	*māter((mother)) (<*&mā((a child's word for mother))
第16項(mourn)	* (s) mer- ((to remember))	*mér-nō-no-m((to be anxious, remember sorrowfully)) (<*&(s) mer-((to think, consider, remember))
第17項(run)	*er-, *ergh- ((to set in motion))	*ré-nw-o-no-m((to move about, move)) (<*&er-, *or-((to set in motion, stir up, raise))
第18項(seven)	*septm((7))	*septm((7))>*sepm
第19項(sorrow)	*swergh- ((to worry, be sick))	*swérgh-o-m((worry))((sickness)) (<*&swergh-((to worry, be sick))
第20項(two)	*dwō(u)	*dwōs((2)) (<*&dwō-(2)) (?)

表3④：表1の語について推定的に再構成されたゲルマン祖語(種々の再構形を含む)

種々のGmc. 措定形 項目 番号(Mod.E.)	COD(第5版, 1964) による Gmc.	COD(第6版, 1976) による Gmc.	Klein (1971) によ る Teut.	Kluge による Gmc.	ODEE (1966) によ る CGmc.
第1項(bold)	*balthaz	*balthaz	?	*baltha- ((kuhn, tapfer))	*balthaz
第2項(broad)	*braidhaz	*braidhaz	?	*braitha-	*braiðaz
第3項(brother)	*brōthar	*brōthar	?	*brōthar	*brōthar
第4項(cold)	*kaldaz	*kaldaz	*kalda-((frozen)) 〈*kal-((to freeze))	*kalða- ((gefroren))〈*kal-	*kaldaz
第5項(dead)	*dauthaz	*dauthaz	*dau-tha, *dau-da((dead))	*dau-ða, *dau-tha, 〈*dau-((sterben))	*dauðaz
第6項(death)	*dau-	*dauthuz 〈*dau((to die))	*dau-	*dau-((sterben))	*dauthuz 〈*dau + *-thuz
第7項(eight)	*ahtō-	*ahtō	?	?	*ahtō
第8項(father)	*fader	*fadēr	?	*fadēr	*fadēr
第9項(four)	?	*petwor-	?	?	*petwor-
第10項(god)	*gutham	*gudh-	*guða- ((the invoked being))	*guða-	*guð-

表④

種々のGmc. 項目 番号(Mod.E.)	OED による CTeut.	Pokorny による Gmc.	Skeat による Teut.	Wahrig による Gmc.	Websterによる Gmc.
第 1 項 (bold)	*bothlo- く*bu-, *bo-⟨(dwell)⟩ +tlo	?	*baltha	*baltha ⟨(kūhn, tapfer)⟩	?
第 2 項 (broad)	*braido-z	?	?	*braitha-	?
第 3 項 (brother)	*brōthar	?	?	*brothar	?
第 4 項 (cold)	*kaldozく*kal-⟨(to be cold)⟩	?	?	*kalda ⟨(gefroren)⟩	?
第 5 項 (dead)	*dau-do-z	?	?	?	?
第 6 項 (death)	*dau-thu-z	?	?	?	?
第 7 項 (eight)	?	?	?	?	?
第 8 項 (father)	*fadēr, *fader	?	?	?	?
第 9 項 (four)	?	?	?	?	?
第10項 (god)	*guðom	?	*gutha ⟨(God)⟩	*guða-	?

表③④

種々のGmc. 指定形 項目 番号(Mod.E.)	研究社, 新英和大辞 典(第5版, 1980)に よる Gmc.	筆 者 に よ る Gmc.	
		前期	後期 Gmc. (CGmc.)
第 1 項 (bold)	*balthaz	*balðáz	*balðaz>*bálð(z)
第 2 項 (broad)	*braiðaz	*braiðáz	*bráiðaz>*bráið(z)
第 3 項 (brother)	*brōthar	*bróðar	*bróðar
第 4 項 (cold)	*kaldaz	*kalðáz	*kálðaz>*kálð(z)
第 5 項 (dead)	*dauðaz	*ðauðáz	*dáuðaz>*dáuð(z)
第 6 項 (death)	*dauthuz < *dau- (to die) >	*dáuθuz	*dáuθuz>*dáuθ(z)
第 7 項 (eight)	*ahtō	*axtō	*axtō
第 8 項 (father)	*faðer	*faðér	*faðer
第 9 項 (four)	*petwor-	*fiðwōriz	*fiðwōriz>*fiðwor(iz)
第 10 項 (god)	*zuðam	*yuðám	*yúð

表3④

種々のGmc. 項目 番号(Mod.E.)	COD(第5版, 1964) による Gmc.	COD(第6版, 1976) による Gmc.	Klein (1971)によ る Teut.	Kluge による Gmc.	ODEE (1966) によ る CGmc.
第11項(hand)	?	?	?	*handu- 《die Fassende, Greifende》	?
第12項(heaven)	?	?	*hama(n)-	*hemina	?
第13項(loud)	WGmc. *hlūth-	WGmc. *hludha	?	*hlūda- 《gehört, hörbar》	WGmc. *zluðaz
第14項(love)	*leuβ-, *lauβ-, *luβ-	*leuβ-, *lauβ-, *luβ-	?	?	WGmc. *leuβ-, *lauβ-, *luβ-
第15項(mother)	*mōthar-	*mōthar-	?	*mōder	*mōðar
第16項(mourn)	?	?	?	?	?
第17項(run)	*rinnan, *rannjan	?	?	?	?
第18項(seven)	*sebhun	*sebhun	?	*seβun, *siβunī	*seβun
第19項(sorrow)	?	?	?	?	?
第20項(two)	?	?	?	?	?

表3⑤

項目番号 種々のGmc. 指定形 (Mod.E.)	OED による CTeut.	Pokorny による Gmc.	Skeat による Teut.	Wahrig による Gmc.	Webster による Gmc.
第11項(hand)	?	?	?	*handu((die Fassende, Greifende))	?
第12項(heaven)	?	?	?	*hemina	?
第13項(loud)	*hlūdō-	?	*hluda < *hlu((to hear))	*hluda-	?
第14項(love)	*lufō-m, *lofo-m, *liufō-	?	*lub	*leub-	?
第15項(mother)	*mōðar	?	?	*moder-	?
第16項(mourn)	*mur-, *mer-	?	?	?	?
第17項(run)	*rannjan	?	*rann < *arn	?	?
第18項(seven)	*seβun	?	?	?	?
第19項(sorrow)	?	?	*sorga	?	?
第20項(two)	?	?	?	?	?

表8⑤

種々のGmc. 指定形 項目 番号(Mod.E.)	研究社、新英和大辞 典(第5版, 1980)に よる Gmc.	筆 者 に よ る Gmc.	
		前期 Gmc.	後期 Gmc. (CGmc.)
第11項(hand)	*handuz	*χamδúz	*χánduz>*χánd(uz)
第12項(heaven)	*χimin-	*χíminaz	*χímin(z)
第13項(loud)	WGmc. *χluðaz	*χlūðáz	*χlúðaz>*χlúð(z)
第14項(love)	WGmc. *leuβ-, *lauβ-, *luβ-	*leuβ-, *liuβ-, *luβ-, *lauβ-	*leuβ-, *liuβ-, *luβ-, *lauβ-
第15項(mother)	*mōðar-	*mōðér, *mōðir	*mōðar
第16項(mourn)	*murnōn (to remember sorrowfully)	*murnōnam >*murnōnan	*murnōn
第17項(run)	*ri-nw-an	*rínwanam >*rínwanan	*rínwan >*rinnan
第18項(seven)	*seβun	*seβúm	*séβun
第19項(sorrow)	*sorg-	*s(w)úrǵa(m)	*s(w)úrǵ(a)
第20項(two)	*twai	*twōz	*twō(z)

◎ 略語・記号一覧表

CGerm.=Common Germanic (C. Teutonic, C. Gotthonic, Gemeingermanisch, Germanique commun と)「共通ゲルマン祖語」あるいは「ゲルマン共通祖語」。尚,「祖語」のかわりに「基語」(Grundsprache)を用いる人もいる。いわゆる「後期ゲルマン祖語 (200~100 B.C.)」をさす。[Gmc. 参照]

Germ.=Germanic (Teutonic, Gotthonic, Germanisch, Germanique と)。[Gmc. 参照]

Gmc.=Germanic (=Proto-Germanic=Proto-Germ.=Proto-Gmc.=PGmc.=PG) (Primitive Germ., Parent Germ., Proto-Teut., Proto-Goth., Urgermanisch, Proto-germanique と)「ゲルマン祖語」をさす。ゲルマン祖語の時代は,しばしば Pre-Gmc. (あるいは Vorgermanisch) (500 B.C. 以前), early PGmc. (500~200 B.C.), late PGmc. (200~100 B.C.) の3期に区分され,特に late PGmc. は C Gmc. ともいう。

Goth.=Gothic, Gotisch, Gotique. 「ゴート語」(4C.)

Idg.=Indo-Germanic (Indogermanisch, Indo-germanique と)「インドゲルマン祖語」(「原印欧語」,「印欧原語」とも)。[IE. 参照]

IE.=Indo-European (=Proto-Indo-European=PIE) (Aryan, Ur-indogermanisch, Proto-indo-européen あるいは単に Indo-européen と)「原印欧語」あるいは「印欧原語」(「印欧祖語」とも)。(3000~2000 B.C.)

OE.=Old English, Altenglisch od. Angelsächsisch, Vieil-anglais. 「古(代)英語」(「古期英語」,「上代英語」,「アングロサクソン語」とも)。(8C.)

OHG.=Old High German, Althochdeutsch, Vieil-haut-allemand. 「古(代)高(地)ドイツ語」(「古期ドイツ語」とも)。(8C.)

ON.=Old Norse, Altnordisch, Vieux-nordique ou vieux-norrois. 「古代北欧語」(「上代スカンジナビア語」,「古代アイスランド語」とも)。(12C.)

OS.=Old Saxon, Altsächsisch, Vieux-saxon. 「古(代)サクソン語」(「上代サクソン語」,「古代ザクセン語」とも)。(9C.)

Teut.=Teutonic, Teutonisch, Teutonique. (Germanic と) [Gmc. 参照]

※=祖語(仮説的推定)を示す。

>=語の発達を示す。

<=語の由来を示す。

◎ 使用した主な文献・辞典

Grépin, A.: Problèmes de grammaire historique. De l'indo-européen au vieil-anglais. Presses Universitaires de France. 1978.

Haugen, E.: The Scandinavian Languages. An Introduction to their History.

- Faber & Faber Ltd. (London). 1976.
- Klein, E.: A Comprehensive Etymological Dictionary of the English Language. Elsevier Scientific Publishing Co. (Amsterdam). 1971.
- Krahe, H.: Indogermanische Sprachwissenschaft. 5. Auflage. 2 Bde. W. de Gruyter (Berlin). 1966-69.
- Krahe, H.: Germanische Sprachwissenschaft. 7. Auflage bearbeitet von W. Meid. 3 Bde. W. de Gruyter (Berlin). 1967-69.
- Meillet, A.: Introduction à l'étude comparative des langues indoeuropéennes. Preface by George C. Buck. Alabama University Press. 1964⁸.
- Onions, C.T. & others: The Oxford Dictionary of English Etymology. Oxford U.P. 1966. (abr. ODEE)
- Pokorny, J.: Indogermanisches etymologisches Wörterbuch. 2 Bde. Francke (Bern). 1959.
- Sykes, J.B. (ed.): The Concise Oxford Dictionary of Current English. 6th edition. Oxford U.P. 1977⁴. (abr. COD)
- Szemerényi, O.: Einführung in die Vergleichende (indogermanische) Sprachwissenschaft. Wissenschaftliche Buchgesellschaft (Darmstadt). 1980².
- van Coetsem, F. & H.L. Kufner (ed.): Toward a Grammar of Proto-Germanic. Max Niemeyer Verlag (Tübingen). 1972.
- Wahrig, G. et al.: Deutsches Wörterbuch. Völlig neu bearbeitet und erweitert. Mosaik Verlag. 1980.
- 研究社: 新英和大辞典. 第5版. 1980.